

「95年を振り返って見るといろいろあったねえ。今のところ私は幸福です。」と丸林政人さん

*丸林さんが生まれたのは、福岡県
大刀洗町高食。大正8年4月12日。
現在95歳。

子供時代はかわいがられて育った

まともにふとった(成長した)のは5名。3人は成人する前に亡くなった。戦争で兄貴は死んだ。女・女・男・女・本人。かわいがられて大きくなった。すそこ(末っ子)じゃったから甘えかぶってやり放題やった。よう覚えてます。

川端で、ちゃんちゃんばらばらば(ちゃんばらごっこ)して遊びよった。芝居のまねばかりしよった。それと、魚とり。鳥飼の川とか筑後川とか、魚とりだけに行きよった。高食の一族郎党を14〜5人引き連れて行きよった。近所のわるそぼうずばかりと行きよった。(実家は)百姓だったけども、稲刈りの稲担ぎしかしよらんかった。

小学校時代は優秀でした

私は体が弱かった。1年間に1週間くらい欠席しよったもん。出席皆勤だったのは小学校6年生のとき1回だけ。勉強もしよったけど、頭はよかつたじやろうたい、1年から6年まで乙をもらったことは1度もない。甲ばつかり。いつも欠席するけん、表彰はいつも2番やった。6年生のときは皆勤やったけん、初めて一等賞やった。6

年のときまでよく風邪ひきよった。体が弱かったけん、親も大目にみよった。ちゃんちゃんばらばらをしよったけん、歴史は詳しかった。織田信長とかの桶狭間の戦いで武田信玄とか、東郷平八郎とか大山巖とかね。西郷隆盛も好き。

進んだ道は船乗りへの道…

小学校6年卒業して、うきは工業高校に行った。陸上競技部に入って駅伝の選手だった(子供たちも駅伝で全国大会に出場するほど)。私たちのところは久留米〜福岡間の駅伝だった。久留米から福岡を5人で走る。私は4区で17キロやった。

私はもともと船乗りになりたかつたちゃん。百姓の子やったけん、中学校にはやられんかった。農学校にも行こごつない、しゃあないもんやけん、親父が行けつちゅうところに行つた。5年で卒業して、佐世保の海軍工廠に入った。船が好いとつたけんが。兵隊行くまで佐世保にいた。今のSSK。佐世保の造船企業。船の設計をしよつた。軍艦の「陸奥・長門」「伊勢日向」航空母艦の「赤城・加賀」も手につけた。



戦争で満州へ

昭和14年で徴兵検査、そして昭和15年の2月10日、入隊した。

野砲連隊に入隊した。3日してすぐ満州に行った。そこで初年兵教育を受けた。ずっと満州にいた。その後幹部候補生になって、学校に入った。同年8月、卒業して現隊復帰した。帰ってきたら関東軍大演習があっていた。ソ連とやる(戦争する)演習ばかりやった。それに参加した。

そして、昭和16年11月1日に陸軍少尉になった。12月8日大東亜戦争が始まった。戦争がはじまって兵隊の異動はあったけど、私は満州から出なかった。ずっと同じところにおった。



→満州の兵舎にて。
中央下が丸林さん。部下と。

奥さん(前妻)と出会いと別れ

出会いは見合い。昭和19年10月に結婚した。中尉は家族携行だったから一緒にいた。満州で兵隊は徴収されて、先生がおらんから、妻は教員をしていた。ロスケ(ロシア人)が出てくるまで。

「(嫁に)来るごたるなら(来たかったら)、来い」と。親まかせ。親が気に入ったもんなら文句は言わんと。親兄弟が見つけた。「あーこれが、俺の嫁ごばいのー」ということやった。今と全然違うよ。敗戦は満州で迎えた。妻(前妻)は引き上げるときに戦争に巻き込まれてなくなった。

*前妻ハツさんは、出兵した夫と別れ、満州での敗戦の中、一人混乱を生きていた。夫と別れてから日記を書き残しており、身重の中生活する様子、出産し18日に子が亡くなったことを書き残している。

終戦(敗戦)後シベリアに2年半

自分はソ連に引っ張られた(抑留された)。シベリアに2年半いた。食うものがないし、労働は過酷だし、寒いし。寒いとは慣れとったけど(満州にいたから)。バターばえらい食べよつた。脂肪を蓄えないかんけん。昭和22年の暮れに日本に帰ってきた。引き上げ船で知り合いと一緒に船だった。

「やまみ丸」という船で北海道の函館に着いた。函館から家まで各駅停車の汽車に乗って帰ってきた。2日半日くらいかかると東京の上野まで来た。

東京からは急行で。するめやらりんごやら途中で買うて。人間もおるが荷物ばつかり。その後、博多に午後3時頃着いた。敗戦人でおかしかけん、日が暮れて帰ろうと東公園のところまで昼寝しとった。それから帰ってきた。博多から最寄の大堰駅まで電車で、そこから歩いて帰ってきた。

帰ってきたら、すぐ再婚の話が出てきて、押し付けられたもんやけん、しかたなく、どうするかと言われて。それに帰ってきて、企業の大將どん(社長)がまわりにおったけん「丸林来い」と言われたけど、百姓せないかんち、足を縛られた。仕方なく百姓した。牛を使っても動かんし、泣こうごたった。逃げ出そうと思った。百姓はルールはわかっつる仕事をしとらんけん。季節の仕事の順序はわかる。それに、兵隊入つてから刀より重いものはもったことがないもんやけん。

終戦後、物の無か状態の中、がちやがちややったから、何か村のためにしてくれじゃったけん、所得税の関係で「課税対策委員」やら、仕事はほったらかして、世話ばつかりしよった。だけんほんな(本当の)百姓はしとらん。その中で佐田川の測量の件で叙勲を受けた。佐田川に一番近くて「せん(しなさい)」と言われて水位の観測を朝晩毎日行つた。一時間おきに測定することもあった。夜中かみなりがなろうとも測定した。

おかげで人がいかないところまでいった(天皇にお会いし、叙勲をもらった)。叙勲のときは、天皇のおこと

ばがあつた。それが74歳のときだった。東京は姉の長男がいたからそれと一緒にに行った。靖国神社にも参つた。

その後は軍人恩給の世話もした。遺族会の世話もしきる限りしよった。軍人恩給はあちこちから依頼があつて書類作成してやつとる。こころへんで生きとつて今、恩給もらいよるのは私ひとりじやろう?みんな死んでしもとろ。

今の家族

妻は、もともと兄貴の嫁だった。結婚して何ヶ月かしかたつてなくて、自分が帰ってきたけん、くっ付けられたたい。百姓せないけんもんやけん。第一印象は「これがおれの嫁か。」だった。ヨソエさんは兄貴の嫁で、昭和16年から来ていて6年いたから、家庭のことをよく知つていた。喧嘩は全然せんかった。手を挙げたこともなかった。口で喧嘩しても。「奥様、奥様」だった。仕事はせんで世話ばつかりだつたけん、もやもやは、しとつたと思う。

子供は3人。女・男・男。長男は外にやつた。(同居している)次男の子は男3人。孫によか嫁はおらんじやろうか。

だいたい今は話相手がいない。同い年もおらん。昼間は寝るばかり。相撲が始まつたらそれが楽しみ。こげん弱るはずじゃなかった。今年の冬は寒かつたけん家におつたけん、足が弱つた。病院も去年までは歩いて医大から西鉄まで歩いて行きよつた。これ以上

は痩せられんごと痩せとる。



現在の丸林さん（95歳）

そして現在96歳目に入りました

95年を振り返って見るといういろいろあったねえ。大体、昭和20年に死んでいるはずじゃった。死に損なって95歳になった。

バイクは、92歳まで乗りよった。その後は取り上げられた。がられた（怒られた）けん、やめた。

気力がなくなつた……。今頑張っていることは「野菜づくり」。自家用の野菜。今年は、すいかを作つとる。またなる（できる）ばい。物忘れはそうでもない。昔のことならようわかる。最近のこつはようわからん。

それと、ひ孫がくるのが楽しみ。それに小遣い銭やるのが楽しみ。

そればつてん、もう長ごねえばい。戦後は、戦争で知り合った仲間、千葉など県外から多くの手紙がきていた。最後は血判で締めくくられるものもあつた。戦争中の絆とはそのように強い。戦友会というものが京都であ

つており、それにも出席していた。87歳くらいまで行っていた。

また、ハツさん（前妻）の50回忌は、うち（丸林家）でした。ハツさんの兄は夫婦連れで来られた。泣いて喜んでくれた。

これからやりたいことは

特にない。あの世にいくことだけ考えとこう。ヨソエさん（現妻）のところ（施設）には毎週行っている。大事なもん。言いよることはよくわからんけど、歌を歌うと分かつて歌うとよ。（ヨソエさんは）ありがたいことに痛いともかゆいとも帰りたいとも言わん。また来るといいうと「もう来んていい」という（笑）。

今のところ私は幸福です。息子も孫もようしてくれる。お国に感謝しないといけないのは、今日まで不自由なく生活させてもらったこと。給料や恩給はもらうなどそれなりの手当てももらつてきた。感謝している。今のところ何も心配はない。欲を言うなら女の手がほしい。

話を聞くと、妻がなくなつたり、抑留されたりと、想像できないような大変なご苦労をされてきていた。そのことを、ときには笑顔で話してくれた。今95歳、「私は幸福です」と笑顔で手を合わせて語っていた。

平成二六年五月二二日

聞き手 棚町 佳菜

（福岡県大刀洗町）